葉貫先生を悼む

阿部肇一

平成12年11月2日、葉貫先生が亡くなられたとの訃報を飯島武次先生から知らされたとき、一瞬その事実を疑った。まだ定年前でもあるし、私の在勤中には、一度も病臥したということを聞いたことがなかったからである。しかも亡くなられる前月、私はミロク会（昭和三十七年三月歴史学科を卒業した同級会）たちから、『卒業してから三十八年ぶりに全員で会合するので出席して貰いたい。当日は葉貫先生も見えることになっているので、是非とも忘れずにその日にお出かけ下さい』との通知で、10月2日、日光鬼怒川温泉の会場に集まった。久しぶりに逢った者たちはすでに還暦もすぎ、すっかり老けていたが、昔日の面影はそのままであった。しかし葉貫君だけはいつまでも顔を見せずじまいであったので、幹事の者が思い余って電話連絡を試みて、やっと奥様と話が通じたという。その時の報告で、『この夏以来具合が悪く、只今入院療養中なので、次回の会合の折には出席するようにするので、今回は皆さんによろしくとお伝え下さいとのことでした』との報告を受けた。私は定年後久方ぶりに葉貫君とも話ができると喜んでいたので、少々がっかりしたが、年をとって風邪でも悪化させたのであろう。いずれ具合が良くなった頃を見計らってお見舞に行って元気づけてこよう、と思っていた。そこへ齎された訃報であった。それ程悪かったのか、病名は一体なんだったのだろうかと疑ったが、翌日の新聞訃報欄に、肺癌にて死去と知って愕然とした。そのような素振りは、生前中は少しも感じられなかったからである。

惟うに葉貫君は私より数年後、本学歴史学科を卒業して暫く寺の用事や研究、アルバイトに係わっていられたと聞く。とく

に歴史学科学生の面倒をよくみていたように記憶している。戦後の厳しい食糧事情で研究者、教育者としての生活も満足にできなかった時代ではあったが、束縛のない自由な社会になって、みな生き〳〵として勉学していたことを憶えている。そのような中で、私も旧制大学を卒業して、当初助手として二人で歴史学研究室の中で、過ごすようになった。葉貫君は日本史、私が東洋史、共に禅宗史を試みて、将来の研究に胸をふくらませていた時であった。葉貫君の第一の功績は新制大学となって間もなくであったが、専門部から大学となった以上、学会のない学部大学は決して大学とは言えない、として歴史学会設立運動をはじめた。当時の若手研究者、学生、卒業者らと共に「駒沢史学」設立に関わったことである。以後本号58号に至るまで、紆余曲折はあったが、よくぞ継続してきたものだとその運営の努力に敬意を表している。その功績・縁下の力は大半葉貫君の力に負うところが大きいのは見逃すべきでないであろう。

私の葉貫君との思い出は多いが、中でも歴史学科親睦発展のため、はじめて全学科の旅行を思い立って、駒沢史学会旅行として出かけた静岡の思い出は大きい。確か昭和三十八年ごろ二十数名の参加者があり、私と葉貫君の他に教授の佐藤堅司先生（西洋史）を指導者として出かけた。富士山の眺めに感歎した清水港、雄大な広がりに驚いた久能山頂、臨済寺の境内の金鳳樹の花の見事さにうたれ、最後に静けさ溢れた曹洞宗洞慶院に参上した。その時のご住職の柔しき御顔と、御法話に感歎して共に帰校したのを憶えている。私の30才代、葉貫君20才代後半のころだったし、学生たちとの年令の差は余りなかったので、和気靄靄のうちに思い出多いものとなった。後譚になるが、後年私が学長職についたとき、総長と二人で一緒に永平寺に拝登し、僧衣を着して不老閣にて貫首猊下禅師にお目にかかったとき、奇しくも猊下はその時洞慶院にてお目にかかったご住職その人であった。私は即座にその頃の話を切り出し御礼を申しあげた時、懐かしそうに話を思い出し、当時若い人や地域社会の交流に務めた御話をされた。ご挨拶だけという申し出が、30分以上も長引いてしまった。その間総長は黙々として私と猊下の話しに頷いており、後から思うと失礼をしてしまったと悔いている。その奇縁の思い出にただ〳〵感激している。

次に日本の経済発展がすすんだ昭和四十年代半（一九七〇）ごろ、彼は町田市に住居を構えて通勤していた。そのとき最大

級の台風が、愛知、関東北部を通過した。家で一晩中まんじりともせず過ごした翌々日、確か阿彦哲郎君からの電話で「葉貫先生宅の被害」を告げられた。慌てて彼と一緒に見舞に連れて行って貰うことにした。小田急線で原町田まで行き、駅から聞きながら探して訪ねていった。町はずれの林の中をみて「この奥の山の上が、葉貫先生の家だと思う」とのこと。驚いたのは小高い山に木々が鬱蒼とした中に通路があった。木の根、岩石を避けながら暫く登ってゆくと、指差して「あの向こうの木の間にみえる家があります」と言った。しかし私の目には家らしい影は見えなかった。通りの脇に一軒家があり、窓は壊れていたが大丈夫のように見えた。また暫く登って大きな岩角を曲がった処で「ここだ!」と彼が呼んだ。そこは家の土台と囲いらしいものはあったが、家の上半分の屋根と家具らしいものは全てなかった。唖然としてしばらく見つめて居ると、離れた処から奥さんが出てきたが、私には何と挨拶を言っていいのか判らなかった。ただ無事と聞いての御喜びの言葉を言うのが精一杯だった。暫くして葉貫君が戻ってきたが、屋根が飛んで隣町に落ちたらしいと告げた。一番心配していた研究論文、資料は皆飛散したとのこと、研究者として、これ又慰めの言葉もなかった。

しかし彼はそこから見事立ち上がって持ち直した。

その時、恐ろしかった一晩を岩かげで過ごしたことを話し、最後に言った言葉は、今でも忘れない。「平らな(所の)生活が一番(上)だ!」と。惟うに平凡な生活が最大の幸ということを感じたのだろう。

さてその定年前、これからゆっくり第二の人生を計っていられたに違いない葉貫君が、それも突然のように逝去されたといぅとは、運命とはいえ、その早すぎる終焉は惜しみても余りあるものである。「仏界一輪の花、六十九年は心骨清涼なり」との遺偈に示された達観に、葉貫先生の心情を想起し、そのご冥福をただただ祈るばかりである。願くば冥界から歴史学科一同をいつまでも見守って戴けることを希って止まない。合掌、拝具。